

大阪市大『創造都市研究』第1巻創刊号 2006年3月  
59頁～75頁

■ 論文 ■

## まちづくりとソーシャル・キャピタル

小長谷一之 (大阪市立大学大学院・創造都市研究科)  
北田暁美 (大林組)  
牛場智 (近鉄百貨店)

Town Management and Social Capital Theory  
Kazuyuki KONAGAYA (Graduate School for Creative Cities, Osaka City University)  
Akemi KITADA (Obayashi corporation)  
Satoshi USHIBA (Kintetsu department store)

### 【目次】

はじめに

- I. いまなぜソーシャル・キャピタルなのか？
- II. ミクロ理論の必要性
- III. ソーシャル・キャピタルのミクロ理論で重要なこと (1)  
- ソーシャル・キャピタルの次元論
- IV. ソーシャル・キャピタルのミクロ理論で重要なこと (2)  
- ネットワーク範囲の問題
- V. まちづくりにおけるソーシャル・キャピタルの例 (1)
- VI. まちづくりにおけるソーシャル・キャピタルの例 (2)
- VII. まちづくりにおけるソーシャル・キャピタルの課題
- VIII. ネットワークの生と死

### 【要約】

社会科学の様々な問題に対する切り口を与えるものとしてソーシャル・キャピタル概念が注目されているが、その実証的研究は、国家や地方などマクロな対象に関するものが多かった。まちづくりなどの都市政策関連分野でソーシャル・キャピタルを考えるためには、ミクロなレベルでモデルを構築する必要がある。本論文では、なぜあるまちづくりは成功するのか、まちづくりを成功させるためには何が必要か、という問題を整理するために、ソーシャル・キャピタルに注目し、さまざまな事例をもとに検討した。

ソーシャル・キャピタル概念をまちづくりのようなミクロ問題に適用しようとする場合には、2つの点が重要になると考えられる。

- (1) 第1は、ソーシャル・キャピタルを構成する次元を、具体的・明示的に把握することが必要な点である。まちづくりといったミクロなモデルにおいては、まず第1に重要な次元が「ネットワークの存在」であり、第2の次元がそのネットワークの強さを示す「信頼関係」であると考えられる。第3次元がもっとも難しいが、広い意味でのまちづくりの互酬性を作り出す社会経済的システムの仕掛けであると考えられ、事例に応じていくつかの有力な要素が抽出できるが、広い意味での革新（イノベーション）に関係する、アートの要素、専門的知識と専門的ネットワーク、経営技術などがあげられると思われる。

(2) 第2は、ネットワークの範囲の問題である。あきらかに、まちづくりのような動態的過程の理解においては、ソーシャル・キャピタルを「狭義の地元」である対象街区の住民のみに限ってしまうのは狭すぎ、全体的な理解を困難にする。この問題は、決して形式的な問題ではなく、まちづくり過程の本質にかかわる面がある。なぜなら、非常に多くの場合、まちづくりの成功には「革新（イノベーション）」の要素が必要であり、それは多くの場合、外部からのキーパーソンによってもたらされるからである。したがって、ミクロな分析では、対象街区とそのほかのキーパーソンから組織された新しいネットワークである「まちづくり組織のソーシャル・キャピタル」が重要であり、それが成長し、地元を活性化するものとしてとらえる動態的な視点が必要と考えられる。

### 【キーワード】

まちづくり、ソーシャル・キャピタル、ネットワーク、信頼、第3次元

### 【Abstract】

Although 'social capital' concept is now often discussed and expected to give new insight into many problems in many fields of social sciences, its empirical studies mainly focused on macro level subjects such as nations, states and provinces. Thus micro level models are needed to deal with urban policy sciences such as town revitalization. This paper tried to construct social capital micro models in order to understand 'Why did the town management work' or 'How to make an town management work' based on some cases.

Following two points are important for social capital concept to apply to town management practices.

- (1) Firstly, it is important to specify dimensions composing social capital explicitly. In town management fields first dimension of social capital is the existence of network, and second dimension is trust. The third dimension is most difficult to define and some sort of socio-economic mechanism to produce reciprocity which related to broad concept of innovations: art, specialty outfits and management skills.
- (2) Second problem is how to define the extent of networks. It is obviously inconvenient to restrict the extent to the narrow district concerned, because usually the success of town management depends on the key members who come from other areas outside the district concerned. Thus in town management processes, the social capital of town management group itself including of both the district members and outsiders is important, which evolves to give good effects to the district itself.

### 【Keywords】

Town Management, Social Capital, Network, Trust, Third Dimension

### はじめに

本論文では、あるまちづくりがなぜ成功するのか、という問題を研究するにあたって、近年都市政策・都市計画分野で注目されるようになってきたソーシャル・キャピタル概念のミクロな問題への適用と理論上の課題を取り上げる。

そもそも、ソーシャル・キャピタルに関する研究は、(ハニファンの社会教育論やジェイコブスの都市社会論などをそのルーツとするという解釈があるが、) これまでの実際の実証研究では、パットナムのイタリア南北問題の説明やOECD・世界銀行による経済開発効果の説明など、マクロな国や地域を対象とするものが主流であった。

そうした意味で、まちづくりのプロセスを説明するような、ソーシャル・キャピタルのミクロな理論の構築はこれからの課題であるといえる。

しかし、つい最近ではあるが、都市関連研究分野でも、ソーシャル・キャピタルへの注目の高まりがみられるようになってきた。たとえば、日本建築学会編 [2005] は、中心市街地活性化が必要な理由の一つとしてソーシャル・キャピタルに言及（矢作弘担当の第2章）しており、都市計画の最新の包括的教科書である高見沢実編 [2006] では、1章分をまるまる割いてソーシャル・キャピタルを取り上げるようになった。こうした変化には、これまでハードな大規模土木事業が中心であった都市整備の分野でも、環境・住民といったソフトな側面のウェイトが増加しつつあることを示すものであるといえる。

ところが、上記の高見沢編 [2006] でもわかるように、その議論ではソーシャル・キャピタルという名称はあげているが、必ずしも経済学、社会学、政治学などのこれまでの研究の成果に直接結びついておらず、これからの問題が多く残されている。

本論文では、ソーシャル・キャピタルの社会科学的研究の成果をふまえた上で、「なぜ、あるまちづくりが機能するのか（=Why did the town management work）？」および、その応用としての「あるまちづくりを成功させるにはどうすればよいか（=How to make an town management work）？」という問題を具体的実証事例の中で考えていくことにしたい。

## I. いまなぜソーシャル・キャピタルなのか？

ソーシャル・キャピタルには広い概念から狭い概念まで幅広い定義が存在する。代表的研究者の一人であるパットナムの定義によれば、「協調的行動を容易にすることにより社会の効率を改善しうる信頼、規範、ネットワークのような社会的組織の特徴」[Putnam *et.al.* 1993, p.167, Putnam 1995, p.67] のことである。

こうした概念が注目されるようになった背景には、

- 1) (政治) Putnam *et.al.* [1993] のように、国や地域の間で民主主義やガバナンスが有効に機能しているかどうかでなぜ差が生じるのか？ ということに関する説明や、
  - 2) (経済) 世界銀行、OECDのように、各国の経済的パフォーマンスの差に関する説明（同じような開発がおこなわれても各国に経済的パフォーマンスの差が生じるのはなぜか？ 生産性の伸びをすべての要素の伸びで説明し、それでも説明できない残差（全要素生産性）などが一つの指標）、
  - 3) (社会) ある社会では犯罪や暴力が生じやすく他ではそうでないことの説明、
- など、現在の社会科学において難問といわれているさまざまな課題に、説明の糸口を提供するのではないかと期待があるからである。

ソーシャル・キャピタルに類似した概念の歴史は実は大変古く、20世紀に入ってからでも、1916年のハニファンの地域社会教育論や、1960年代から始まるジェイコブスの都市近隣社会論 [Jacobs 1961] などまでさかのぼるといわれている [Putnam *et.al.* 1993]。しかし、ソーシャル・キャピタルという概念を現在の経済・政治学の分野の研究舞台に持ち込んだ立役者の一人はまぎれもなくパットナムである。

イタリア南北問題をソーシャル・キャピタルの差で説明しようとした前述のPutnam *et.al.* [1993] や、もともと社会的活動に熱心だったアメリカ社会が、急速にソーシャル・キャピタルを失っていくことを「独りでボーリングする (Bowling Alone)」アメリカ人の増加によって象徴的にとらえ分析したPutnam [1995] が大きなきっかけになり、それが1990年代後半以降の研究の増加につながったのである。

これらのことから、ソーシャル・キャピタルは地域・都市の問題を説明し、解決するにも有効であると考えられるが、わが国ではその導入は政治学・経済学分野から始まったため、その具体的な適用例はあまりない。

いいかえると、これまでは、ソーシャル・キャピタルの研究、特に経済的研究において、

(E命題) なぜ、ある経済は成功し、なぜある経済は成功しないのか？

というところが課題であったといえる（この側面の研究に関しては、1990年代初頭までの経済のパフォーマンスの違いを、高信頼性社会（日本、ドイツなど）と低信頼性社会（中国、イタリアなど）との間の差で説

明したFukuyama [1995] の信頼論などがある)。

ここでは、それをミクロな地域振興問題に変換し、

(T命題) なぜ、ある「まちづくり」は成功し、なぜある「まちづくり」は成功しないのか？

という点に着目するミクロ理論の構築を目指すことになる。

## Ⅱ. ミクロ理論の必要性

まちづくり・地域振興のみならず、ソーシャル・キャピタルを、ミクロな問題に適用しようとする場合には、

1) 具体的な人間集団・地域について、ソーシャル・キャピタルを具体的・操作的に定義できなければならない、

2) そのソーシャル・キャピタルを、ある程度具体的に、明示的に測定できなければならない、  
ということになる。いいかえると、まちづくりに限らず、ミクロ問題では、この2点が欠かすことができないし、逆に、この点における知見が増えれば、ミクロ問題一般についての応用が利くということになる。

この点が重要なのは、現在、ソーシャル・キャピタルの経済的研究の多くは、マクロ実証のレベルにとどまっているからである。

(説明変数) マクロ的なソーシャル・キャピタル指標で明示的に測定できそうなもの(ボランティア団体の数やアンケート結果など)と、

(目的変数) マクロ的な経済指標(経済成長率などのパフォーマンス)

との間の回帰などの統計的手法を使って説明することが多いからである(OECDやWorld Bank)。

しかしながら、単純相関が因果関係を意味しない、説明変数・目的変数の両者に関係するかくれた変数の存在の可能性を否定できないなど、マクロ的集計分析には一定の限界がある。やはり、具体的な対象に関するミクロモデルを組み立てていく必要があるのである。

## Ⅲ. ソーシャル・キャピタルのミクロ理論で重要なこと (1)

### —ソーシャル・キャピタルの次元論

そこで、ソーシャル・キャピタルのミクロモデルであるが、筆者らは、ソーシャル・キャピタルのミクロ理論にとって重要なのは、「ソーシャル・キャピタルの次元論」であると考えている。それは、必ずしも定量的な形でなくとも、ソーシャル・キャピタルをなんらかの形で評価・測定するためには、その中に内在する次元(dimension)を特定する必要があるからである。逆に、こうした次元を特定できれば、ミクロ理論が大きく進展する可能性があることは期待できる。

このことは、パットナム自身も、「…われわれはソーシャル・キャピタルの諸次元を分類しなければならない。ソーシャル・キャピタルは、言葉のうえではまったく逆に思われるかもしれないが、明らかに1次元的な概念ではない。どのようなタイプの組織やネットワークが、互酬性、集団行為のジレンマの解決、社会的アイデンティティの拡張といった意味でのソーシャル・キャピタルを、最も実効的に具現化する(あるいは生み出す)であろうか。本章ではとくに団体活動の密度に注目してきた。… [Putnam *et.al.* 1993, 第6章、坂本訳]」と指摘している通りである。

それでは、具体的にはどのように定式化できるのだろうか。

### 1. ネットワークの量と質(強さと深さ)

その手掛かりの一つと考えられるのが、ノリスの議論である(Norris [2002])。

ノリスのモデルは、2元論である。

表1：ソーシャル・キャピタルによる社会の類型化

		構造的次元（連帯的活動）	
		弱	強
文化的次元 （社会的信頼）	強	混合型	豊かなソーシャル・キャピタル
	弱	貧しいソーシャル・キャピタル	混合型

出典：Norris [2002], p.153.

1) 第1の次元は、構造的次元とよばれ、社会的ネットワークであり、公式的ネットワークと非公式的ネットワークにわけられる。実証的には、ほとんどの場合、PTAのような公式的ネットワークが測定の対象になる。

2) 第2の次元は、文化的次元と呼ばれ、社会的信頼の次元を示す。

この両者によって、特徴づけられるのであるが、あきらかに後者の方が定義も測定も難しい。

ところで、冒頭のようにパットナム自身も、信頼、規範、ネットワークと述べているが、ここでは、パットナムそのものではなく、ノリスの考え方も含めて、まちづくりというマイクロモデルに適用できるように考えることにしたい。

## 2. ソーシャル・キャピタルの第1次元＝ネットワークの存在（ネットワークの量的側面）

ネットワークの存在は、理論的にも明快な概念であり、また実際のフィールド調査でも社会的ネットワーク図として表現でき、操作的にも明確な概念である。

それゆえ、われわれは、マイクロ理論では、「ネットワーク（の量的側面）」は、第1に重要なソーシャル・キャピタルの要素であると考えたい。

ネットワークがなければソーシャル・キャピタルはあり得ないし、より大きく強いネットワークがソーシャル・キャピタルの基礎になることは確かである。

ただし、ただネットワークがあればよいというものではない。

現在は、Putnam [2000] におけるネットワーク類型論

1) 接合型 (bridging) ネットワーク＝水平型で開放的なネットワーク

2) 結束型 (bonding) ネットワーク＝垂直的で閉鎖的なネットワーク

においてもわかるように、ソーシャル・キャピタルにとって望ましいネットワークと望ましくないネットワークの区別が重要になってきた。

このことも、マイクロ理論においては、ソーシャル・キャピタルにおけるネットワークを量と質の観点でまず2分類するノリスの枠組みが手掛かりになることがわかるであろう。

また、マイクロ理論において対象となる多くの社会では、なんらかのレベルのネットワークは、まず存在していることがほとんどである（ネットワークが存在しないような極度に分断化された社会は、そもそもソーシャル・キャピタルがほとんど存在していない）。

そこで、まずソーシャル・キャピタルの第1条件として、ネットワークは存在しているのだと仮定して、そのネットワークの質によってソーシャル・キャピタルの強弱を考えるという枠組みがよいということになる。

まちづくりの分野では、直田 [2005] の千里ニュータウンの研究のように、ネットワーク図を利用するものも現れるようになってきた。しかし、そこでは、ネットワークは、まちづくり組織について考え、その地域の他の条件との差違があまり認識されていない。本論文では次節でその点を検討する。

## 3. ソーシャル・キャピタルの第2次元＝信頼（ネットワークの質・強度）

ソーシャル・キャピタルの質的側面のうち、もっとも特定しやすく、アンケート（クロスセクション型、

パネル型いずれにおいても)でもある程度容易に測定できるのが「信頼」と思われる。

ソーシャル・キャピタルにおける信頼に関しては、アスレイナーの信頼論 [Uslaner2002] という議論があり、

- 1) 特定の相手に対する「特定化信頼」、および、
- 2) 未知の人間一般に対して普遍的に信頼をおく「普遍化信頼」、

があり、後者の方が望ましいとされている。

この信頼の質は、パットナムの接合型と結束型にやや対応しているところがある。ソーシャル・キャピタルのネットワークの質からいうと、接合型ネットワークと普遍化信頼の方が、結束型ネットワークと特定化信頼に対して、より高度なものであり、したがってソーシャル・キャピタルもより高いとみる立場が一般的である。

#### 4. ソーシャル・キャピタルの第3の次元

パットナムのソーシャル・キャピタルの定義において最後まで残されたもの、たとえばPutnamの「規範」などは、実は社会科学において、ソーシャル・キャピタルの第1次元、第2次元としたネットワークや信頼に比べれば、もっとも難しい概念といえる。

このことは、ノリスの2元論ともそれほど矛盾しない。ノリスのソーシャル・キャピタルの2つの次元の定義のうち、構造的次元はネットワークの量にほぼ対応するが、文化的次元ははたして狭義の信頼のみといてよいのか疑問が残る。したがって、ソーシャル・キャピタルの要素のうち、ネットワーク(第1次元)とその強さとしての信頼(第2次元)以外は、残された要素、残差(第1次元と第2次元によっても説明できなかった残り)を第3の次元として、「その他すべて」要素といえるが、実はそこがもっとも難しい部分である。

これまでに指摘されてきた、第3の残された次元として、もっとも明快なのは「互酬性」ではないかと思われる。これを、まちづくりのミクロ理論に当てはめると、地域の構成員が長期的(短期的ではない)にはなんらかの形でお互い恵みをうけるようなメカニズムであるといつてよい。

すなわち、ミクロなモデルとしては、

[まちづくりにおける成功要因]

≡ [ソーシャル・キャピタル]

≡ [ネットワーク(第1次元) +  $\alpha$  +  $\beta$ ]

$\alpha$  = 第2次元、信頼(ネットワークの質・強度)

$\beta$  = 第3次元、広い意味でのまちづくりの互酬性を作り出す社会経済的システムの仕掛け

という枠組みになる<sup>10)</sup>。

しかし実際には、第3次元、すなわち、そのような「地域の仕掛け」は、さまざまな形態で発現されると考えられる。これだけでは、ただ「その他すべて」といつているに等しい。

この第3の要素は具体的にどのようなものなのか? を地域の成功事例をもとに解明することが課題である。

## IV. ソーシャル・キャピタルのミクロ理論で重要なこと (2)

### ーネットワーク範囲の問題

まちづくりのミクロモデルで考えられるソーシャル・キャピタルのネットワークの範囲には、

- 1) メソスケールとしての地域(都市全体や自治体)
- 2) まちづくりの対象としての街区

の2つが考えられる。

このようなネットワーク範囲の問題が出てくる理由は、非常に小さな街区コミュニティのみで考えると、まちづくり活動がその中で完結しないことが多いからである。

まちづくりに決定的役割を果たすキーパーソンは、ほとんどの場合、メソスケールとしての地域・都市内部の出身者である。しかし、彼らはメソスケールとしての地域の出身者ではあっても、まちづくりの直接の舞台である小街区の古くからの住民であるとは限らないことが一般的である。

また、まちづくりの正否に直接かかわるのは「まちづくり組織のソーシャル・キャピタル」である。まちづくり組織には、当然街区以外の人間が入ってくる。街区の人間とそれを応援する外の人間の両者をいっしょにしてネットワークを考えなければならないのである。この視点に立つのが直田 [2005] のネットワーク図である。

それどころか、まちづくりに必要な「革新（イノベーション）」という側面を導入するのはほとんどの場合、当該街区の人間ではなく、ある程度外部の人間である。それは、既存のコミュニティが停滞段階にあるところに「革新（イノベーション）」をもってくることから明らかであろう。

このようなことを考えると、まちづくりのソーシャル・キャピタルを考える場合には、対象街区のみの範囲でソーシャル・キャピタルのネットワークを考えるのは、ほとんどの場合、狭すぎるということがわかる。街区の人間と、同じ都市内の出身ではあるが、街区の外部のキーパーソンを含めたネットワークが良好に機能しているかどうか、が重要であり、そのためには「まちづくり組織のソーシャル・キャピタル」をまず考えなければならないのである。

それを以下のようないくつかの事例をもとに検討してみよう。

## V. まちづくりにおけるソーシャル・キャピタルの例 (1)

### 1. キーパーソンとNPO

空堀商店街の町屋再生プロジェクトであるからほり倶楽部は、大阪のまちづくりの成功例の一つとして有名である [たとえば小長谷2005a]。この地域は、秀吉大阪城の南の堀に当たり、土地の勾配があり、かつ戦災を免れたという偶然がかさなり、大阪でも珍しく古い長屋物件が多数残っているところであった。

このからほり倶楽部プロジェクトのキーパーソンは建築家の六波羅雅一氏である。氏がプロジェクトを構想するようになった契機の一つがNPO法人街屋集団での参加であった。このグループ自体は、阪神淡路大震災を契機として、建築家やディベロッパー関係者が1996年5月に組織したもので、主たる活動は、月1回のペースで行われてきたまちづくりや環境に関する研究会（2005年末までに118回を数える）と、コンサルティング・ワークショップ事業である（NPO法人としての認証は2001年8月）。

### 2. 商店街との出会い

この街屋集団が外に出て活動した最初の例が、1998年度におこなったボランティア協力の「空堀商店街まちおこし活性化」活動であった。これは、小学校廃校の跡地（図1の東部のA商店街に面した、現在の空堀桃谷公園）を公園に転換するときの工事の仮設の壁に絵を描こうというワークショップであった。

六波羅氏は、もともと一時南大阪で仕事をしていた建築家であったが、設計事務所を空堀で開くことになった。最初のオフィスが図1のBの箇所で、その後、Cの箇所の第2次オフィスに移転し、そのときにこの商店街の話が持ち上がったのである。

跡地を利用する工事の間、商店街に面している壁（C）の印象が寂しいということで、地元のA商店街が、壁のオーナーである市に許可をもらい、壁に絵を描くワークショップを開催することになったものである。この話を街屋集団でまとめたのが元理事のMi氏で、Mi氏は地元出身でDに自宅を持ち、義理の父親がEに店舗をもつA商店街のメンバーであった。いわば、初期のまちづくり組織の中で地元のコミュニティ側のメンバーとして最初の結びつきを作ったのがMi氏であった。

### 3. 説明会からの組織立ち上げ

このワークショッププロジェクトが契機となり、六波羅氏は、空き屋となった長屋<sup>(註2)</sup>の紹介や、物件としての説明会、まちのマップ作り、まちあるきワーキンググループなどの活動に乗り出すようになる。

この長屋物件の説明会を行ったのが、西部の団にある「心裸」である。当初、六波羅氏と、地元不動産業者と心裸オーナーO氏の3名が中心になり説明会を主宰、2001年4月に第1回を開き、1回に5軒程度のペースで説明をおこなっていった。供給側の物件は上記地元不動産業者が情報を提供し、テナント候補の方は、ホームページによる紹介とメールという手段で集め約10組以上が参加した。

この説明会活動をきっかけとしてあつまった約40名の人々を中心となって「からほり倶楽部」を立ち上げることになる。この約40名が、「まちづくり組織」の初期メンバーといえるが、その構成は、NPO法人街屋集団の関係者としては、代表の六波羅氏の他、からほり倶楽部現理事のY氏とMa氏があり、それに地元の人や他地域の人々であった。

長屋再生の第1号物件としては、地域北西部の長堀通り沿いの団にある物件のグラフィックデザイン事務所へのリノベーションが決まった。

これに続く物件としては、仮設壁プロジェクトのあった空堀桃谷公園に面し、商店街から北に入った団にある鉄骨4階建てのクリーニングのプレス工場跡の話が入ってきた。六波羅グループの活動を聞いたA商店街の方で、商店街内の物件は直ぐ出せないが、いわば実験としてその近くの物件を斡旋してきたのである。この物件は、六波羅氏の友人がテナントとなりフランス料理屋となった。これが現在の有名な「からほり亭」である。

### 4. 「まちアート」のイベントの企画

最初参加した不動産業者やO氏が一旦離れ、六波羅氏にも転機が訪れる。長屋物件をただ紹介するだけでは不動産業と同じでありまちづくりではない。地域を変えること、それはコミュニティの意識を変えることに他ならないといえる。長屋を残したいという意識が高まることによって長屋に入居させるという気が起こるのである。当初、地元の長屋のオーナーに説明をしても「こんなボロボロの家に入る者がいるのか？」と疑心暗鬼の人が多かったという。つまり、この段階で街の良さに住民自身が気づいていなかったということであり、それに、住民自身がどう気づいていくか？ がポイントであった。

この問題を解決したのが、当時からほり倶楽部の理事であったA氏であった。このように新しいアイデアを持ち込こんだA氏は、地元ではなくからほりの集會に飛び込みで参加したサラリーマンである。A氏が注目したのは「風の盆」で有名な富山県八尾（やつお）の「坂のまちアートinやつお」というイベントであった。これは、まちの辻、路地、家の壁等にアートを置いて鑑賞してもらうもので、A氏がリーダーシップをとり、初期メンバー約40名でこの「まちアート」イベントを見学に出かけたところ、大変面白いものであることがわかった。やつおの町の人間にヒアリングしたところ、自分の町と町屋に誇りをもち自慢する者、イベント紹介のビデオを見ていけと勧める者などばかりで、結局、そういう気持ちを起こさせることが大事であるということに気づいたという。このように、町の人間自身が変わってきていることが重要ということであった。町の人々の意識を高めるため、アートという媒体を石畳の上に置き、この町は良いとアーティストが来て言ってくれることが大きいということである。

2001年秋に、これをモデルとした「からほりまちアート」を企画する。第1回目で金曜前夜祭に2500人が参加した。これはプレの準備祭のつもりだったが、大変多くの参加に驚き、2002年の第2回目は、土日として、その結果、1万2000人が参加した。

このからほりまちアートのプロジェクトでは、人間のネットワークの進化も大変重要な側面をもっている。

このプロジェクトを成功させるためには、アートを置く地元の長屋側の了承・理解と、アートを展示するアーティスト側の参加・協力の2方向にネットワークを伸ばすことが必要不可欠である。



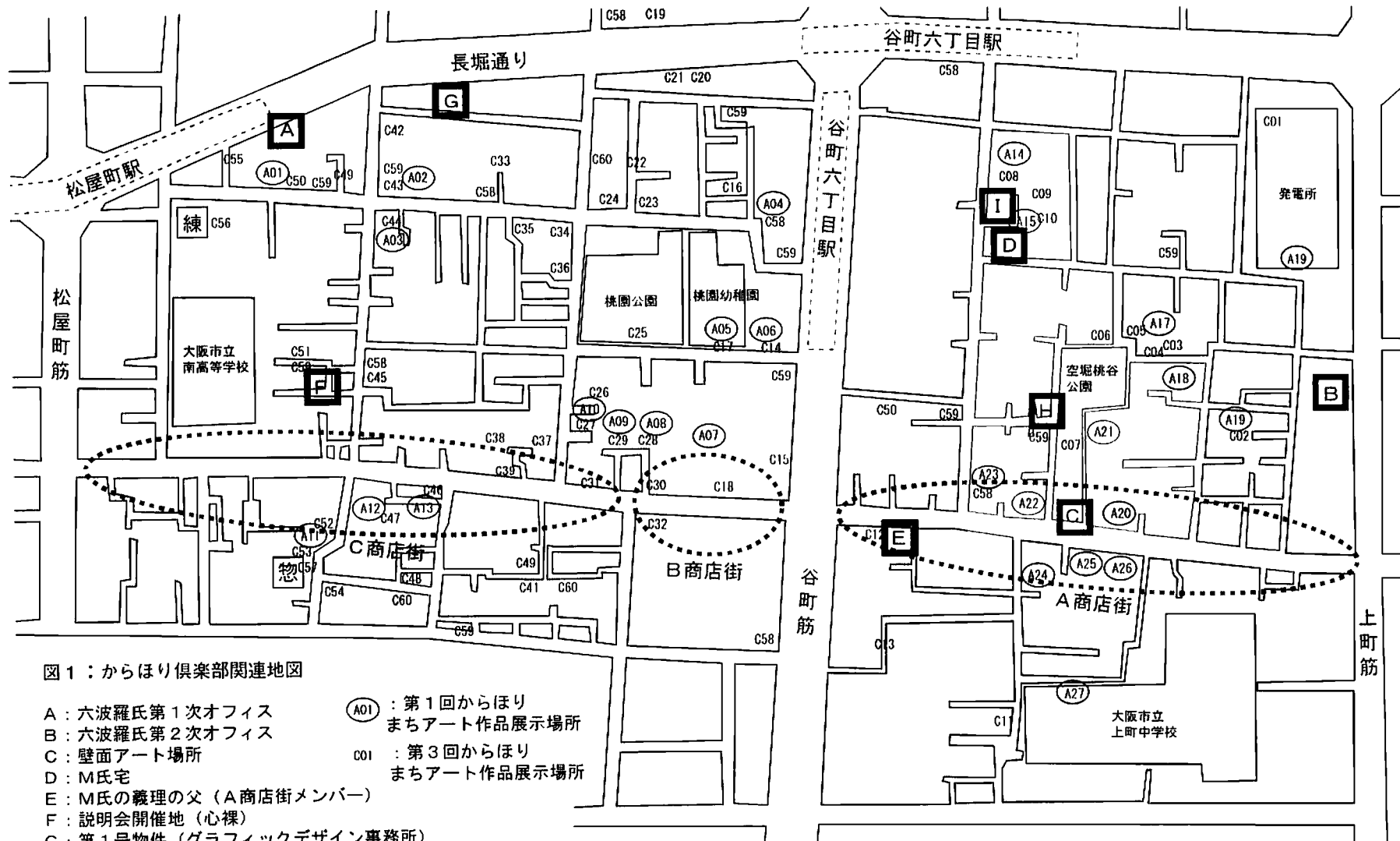


図1：からほり倶楽部関連地図

- A：六波羅氏第1次オフィス
  - B：六波羅氏第2次オフィス
  - C：壁面アート場所
  - D：M氏宅
  - E：M氏の義理の父（A商店街メンバー）
  - F：説明会開催地（心裸）
  - G：第1号物件（グラフィックデザイン事務所）
  - H：第2号物件（からほり亭）
  - I：楓ギャラリー
- A01：第1回からほり  
まちアート作品展示場所
  - C01：第3回からほり  
まちアート作品展示場所

まず前者の地元長屋とのネットワークであるが、3つある地元商店街<sup>(註3)</sup>のうち、第1回目は、仮設壁プロジェクトから親しかったA商店街がもっとも積極的にサポートをしてくれたが、あとは回覧程度で、勝手に、という感じだったという。そのため、地元の長屋に外部の人間が直接いくわけにもいかず、地元の青年団にいっしょにまわってくれるように頼んだ<sup>(註4)</sup>。

知り合いの食堂は当日あけてくれたが、開けた店は満員になった。このように、成功するようになると、長屋の交渉でも理事長もいっしょにまわってくれるようになった。また、当日も、定休日でもあけたり、お茶をだすようになったのである。

図1中、「A+数字」が、2001年第1回展示サイトであり、「C+数字」が、2003年第3回展示サイトである。地元の長屋方面の人的ネットワークは、最初はA商店街のある東部が中心であったが、その後、全体に広がり、より濃密になっていく様子がわかる。

次に後者のアーティストとのネットワークであるが、地元の区にある楓ギャラリーと、京都造形大や大阪産大の講師をしているN先生という芸術系の専門家の2つのルートでアーティストを集めたという。場所の選定＝長屋側との相性も重要なので、アーティストにまず地域を自由にまわってもらい、どこに出店してみたいかを第3希望まで出してもらって、交渉したほどである。家の表だけでなく玄関も貸すことがあった。この「まちアート」プロジェクトの成功の鍵は、自己表現を目指す若手アーティストの協力が良好だったこと、アーティストのネットワークが広報の効果を高めたことなどにある。

もともと地元は、震災にあわなかっただけあって、昔からの古いコミュニティが残っており、六波羅氏も最初は「よそのもの」である。氏によれば、「50年すんでいても新米です。町会のバス旅行でも、「誰々が一番古い」という話ばかり」という。

しかし空堀倶楽部の活動により、町内会もだいぶ変わってきているという。いろいろな人が空堀倶楽部の町屋リノベーション拠点<sup>(註5)</sup>を訪ねてくるようになってきているという。古く強いコミュニティは、「一旦味方につけると強い(六波羅談)」ということである<sup>(註6)</sup>。

このようなプロセスをまとめると図2のようになる。キーパーソン<sup>(註7)</sup>の六波羅氏と地元を中心とした新たなまちづくり組織のネットワークが形成され、そのネットワークがより大きく、強く、深くなっていく様子が読み取れる。

## VI. まちづくりにおけるソーシャル・キャピタルの例 (2)

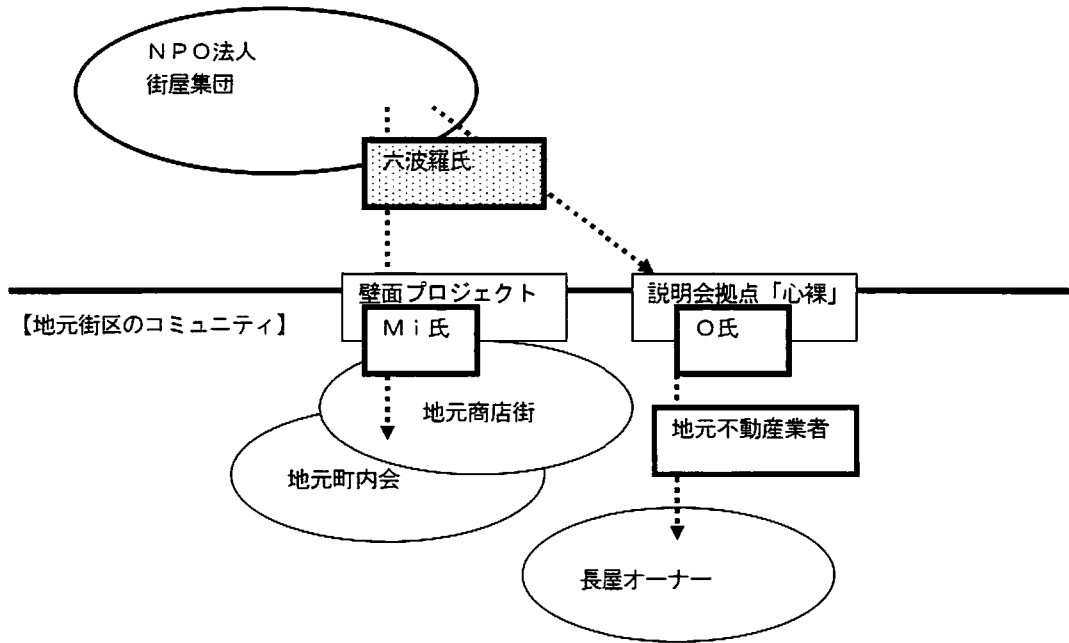
このような例は、決して特殊なものではない。

既に北田 [2005] によって調べられている京都三条あかりプロジェクト (図3) や泉北アートプロジェクト (図4) では、「スーパーバイザー」「プロデューサー」「事務局担当」「渉外」「地元」「広報」「ボランティア」「アーティスト」などが、「成功するまちづくり組織のネットワーク」にとって重要な存在であることが指摘されている。

また牛場 [2005] によって調べられている福島商店街プロジェクト (図5) では、地元キーパーソンであるK野氏というプロデューサーが占術師という外部の専門家と結びついたネットワークを形成し、中津商店街プロジェクト (図6) では、N尾氏という音楽プロデューサーが地元商店街側のキーパーソンと組んで地域へネットワークを伸ばす形となっている。

まちづくりの対象街区の人間とキーパーソンからなる「まちづくり組織」のネットワークが、信頼を得ることによって新しいソーシャル・キャピタルを形成し、それが成功することによって、地域のソーシャル・キャピタルも高まっていくということである。

(1) 商店街壁面プロジェクト・説明会時



(2) からほりまちアート時

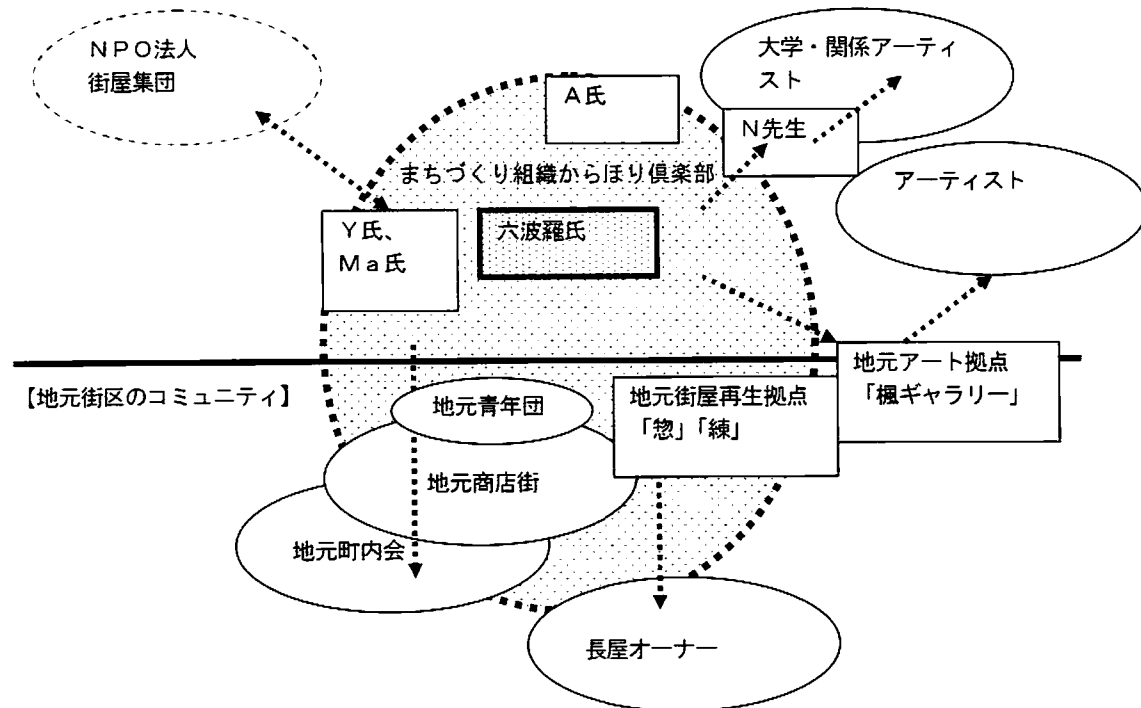


図2：からほり倶楽部プロジェクトのネットワーク

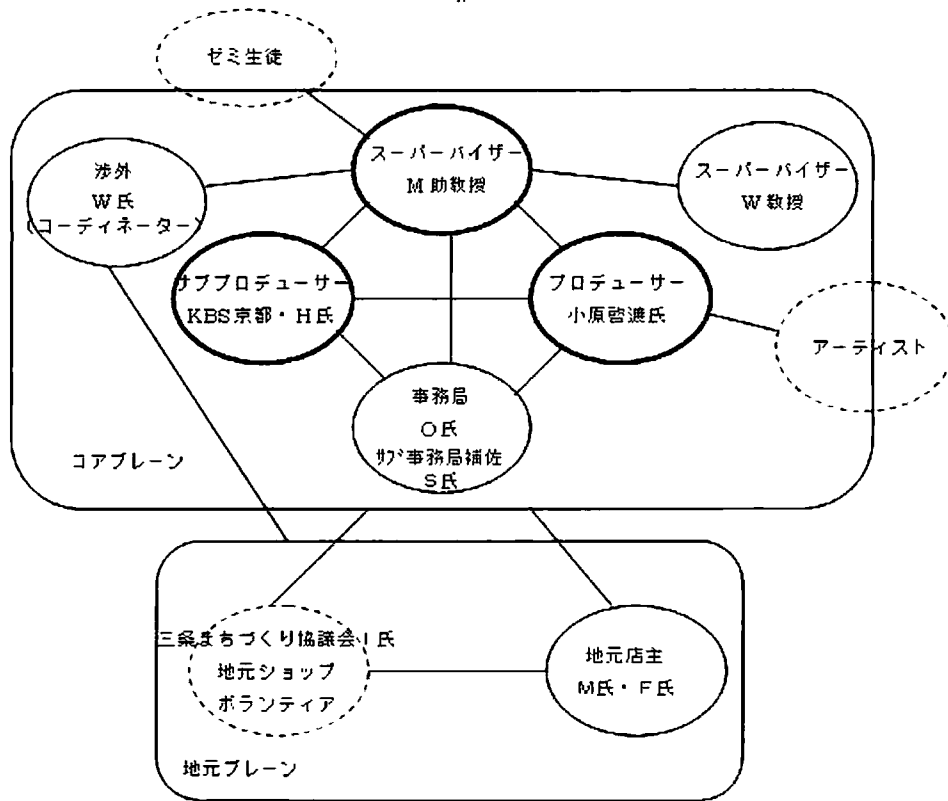


図3：京都三條あかりプロジェクトにおけるまちづくりのネットワーク  
(出典：北田 [2006] )

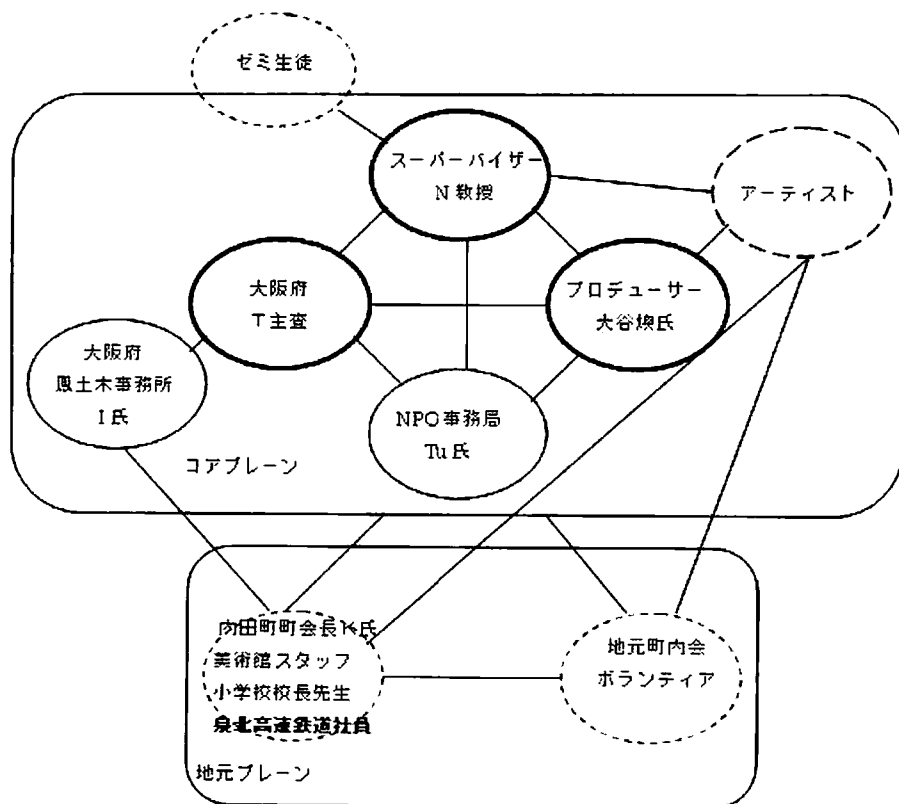


図4：泉北アートプロジェクトにおけるまちづくりのネットワーク  
(出典：北田 [2006] )

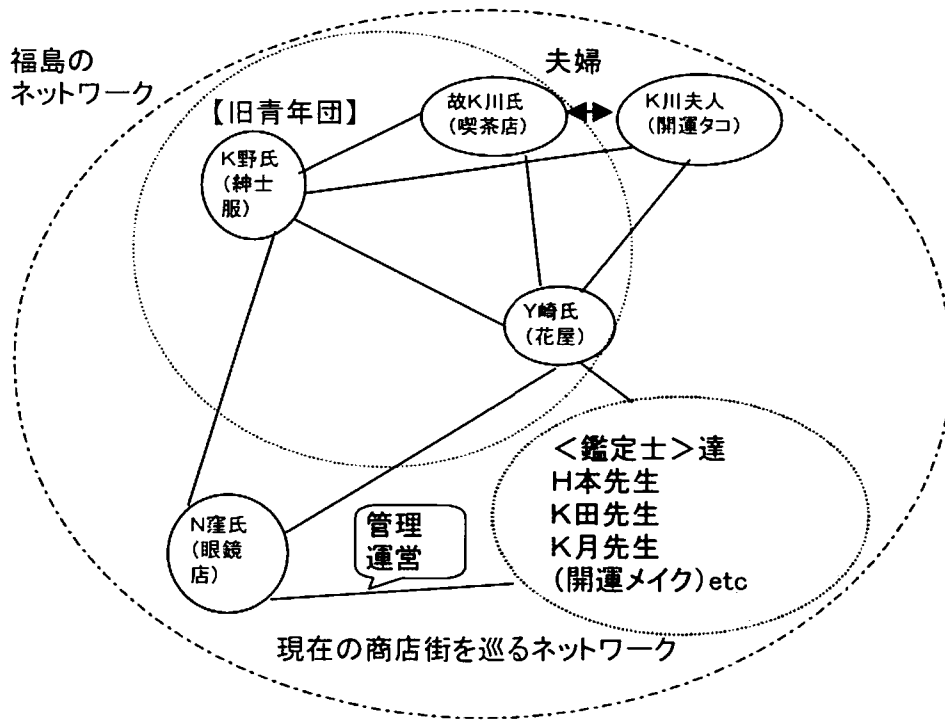


図5：福島商店街におけるまちづくりのネットワーク  
(出典：牛場 [2006])

中津のネットワーク

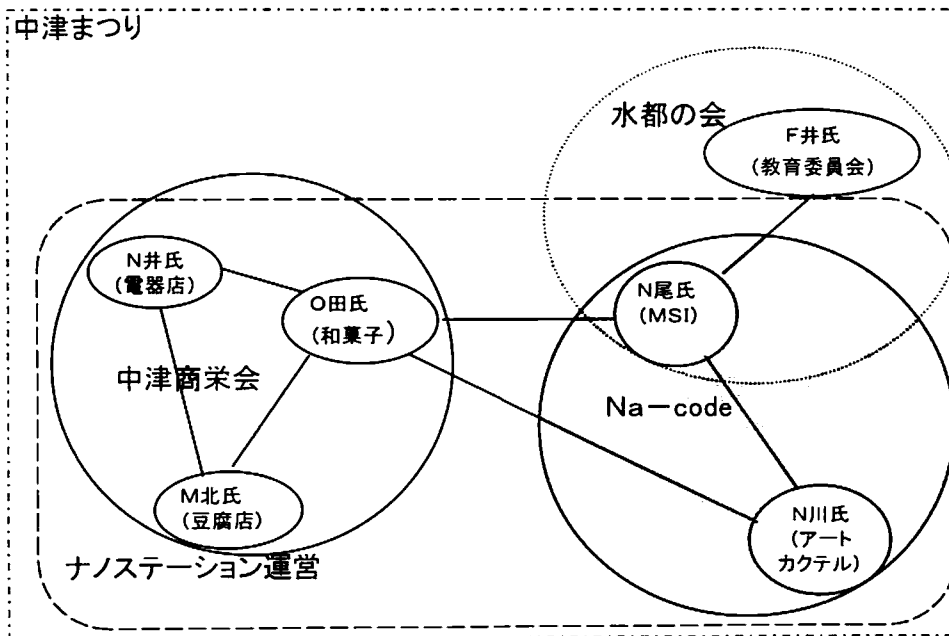


図6：中津商店街におけるまちづくりのネットワーク  
(出典：牛場 [2006])

## VII. まちづくりにおけるソーシャル・キャピタルの課題

### 1. ネットワークの範囲の問題

上記のように、あきらかに、まちづくりのような動的過程の理解においては、ミクロな状況におけるソーシャル・キャピタルを「狭義の地元」である対象街区の住民のみに限ってしまうのは狭すぎ、全体的な理解を困難にする。

この問題は、決して形式的な定義の問題ではなく、まちづくり過程の本質にかかわる面がある。なぜなら、非常に多くの場合、まちづくりの成功には「革新（イノベーション）」の要素が必要であり、それは多くの場合、外部からのキーパーソンによってもたらされるからである。

したがって、まちづくりにおけるソーシャル・キャピタルのミクロな分析では、「まちづくり街区のソーシャル・キャピタル」とともに「まちづくり組織のソーシャル・キャピタル」も重要であり、それは、対象街区とそのほかのキーパーソンから組織された新しいネットワークといえる。

まちづくり組織は、既存の地域コミュニティに接続・立脚しながら成長するが、そのことが、逆にフィードバックされて、既存の（商店街や町内会などの）組織や地域コミュニティを活性化し、全体としてのソーシャル・キャピタルを増加させる。このことは、ソーシャル・キャピタルのマクロレベルにおいて、これまで、ソーシャル・キャピタルの自己強化性、累積性、好循環性などと言われてきた性質のミクロ的位置づけをあたえるものと考えられる。

まちづくりの成功を説明するには、まちづくり組織のソーシャル・キャピタルが重要であり、それが、「ネットワーク形成」→「信頼構築」→「第3次元の展開」という要素を経て成長するものとしてとらえる動的な視点が重要と考えられる。

### 2. ソーシャル・キャピタルの第3次元について

こうした事例では、ソーシャル・キャピタルの第1次元であるネットワークが形成され、第2次元である信頼も獲得されている。したがって、問題提起した、

[まちづくりにおける成功要因の公式]

≡ [ソーシャル・キャピタル]

= [ネットワーク（第1次元）+  $\alpha$  +  $\beta$ ]

$\alpha$  = 第2次元、信頼（ネットワークの質・強度）

$\beta$  = 第3次元、広い意味でのまちづくり互酬性を作り出す社会経済的システムの仕掛け<sup>[註1]</sup>

における第3の次元はなにか、ということであるが、北田 [2005] は、この第3次元をアートがもつ効果、外部性であるとし、牛場 [2005] は、商店街振興においては、専門家集団の利用と経営技術により、外部にネットワークを伸ばす効果であるとしている。まちづくりにおいてこうした要素はいずれも重要なものと思われる。

具体的な形態は、まちづくりの現場によっていろいろあり得るが、いずれの場合も、第3次元 $\beta$ は、広い意味でのなんらかの革新（イノベーション）に関わる要素であると思われる。

## VIII. ネットワークの生と死

最後に、地域コミュニティとまちづくり組織との関係を、ネットワークのライフサイクルという視点から考えて結びとしたい。

図7は、縦軸にソーシャル・キャピタルの第1次元であるネットワークの量（下ほど大きい）を取り、横軸にソーシャル・キャピタルの第2次元である信頼の量（左ほど大きい）をとった2次元空間上で、ネットワークの分類を行ったものである。当然、右上から左下に向かって斜め方向にソーシャル・キャピタルの量

は大きくなる。

このようにすると、標準的なネットワークの分類と位置づけができるようになる。

第1象限（右上）は、ネットワークの量・信頼いずれも小さく、①新しく生まれたばかりのネットワークを表している。

やがて時間がたつにつれて、信頼が増し、第2象限（左上）の②ネットワークの成長段階を経て、ネットワーク自身の量も増し、第3象限（左下）の③ネットワークの成熟・完成段階に入ると考えられる。この段階でソーシャル・キャピタルは極大になる。

ところが多くのネットワークは、古いコミュニティにみられるように④老朽化・老齢化していく（第4象限の方へ移動）。

バットナムの観察したイタリア南部社会や、結束型ネットワークのように、縦的な関係は濃密で強いが、柔軟性を失った社会がこれにあたる。このようになると、結果として、信頼も下がり、ソーシャル・キャピタルも低下する。

なぜ多くのネットワークは、このような老朽化の罫に陥るのだろうか？

その一つのヒントは、ソーシャル・キャピタルの第1次元と第2次元を表現したこのグラフでは現れていない、第3次元（広い意味でのまちづくりの互酬性を作り出す社会経済的システムの仕掛け）にあると考えられる。

多くのネットワークは、ある時期、広い意味での互酬性を作り出す社会経済的システムの仕掛けを作り、ソーシャル・キャピタルを完成させる。しかし、この第3次元は時間とともに変化する外部環境と深い関係にあるのが普通であり、そのままでは、外部環境の変化に柔軟に対応していくことができず、互酬性が低下する。こうして、ネットワークは時代遅れとなり、信頼性も低下すると考えられる。

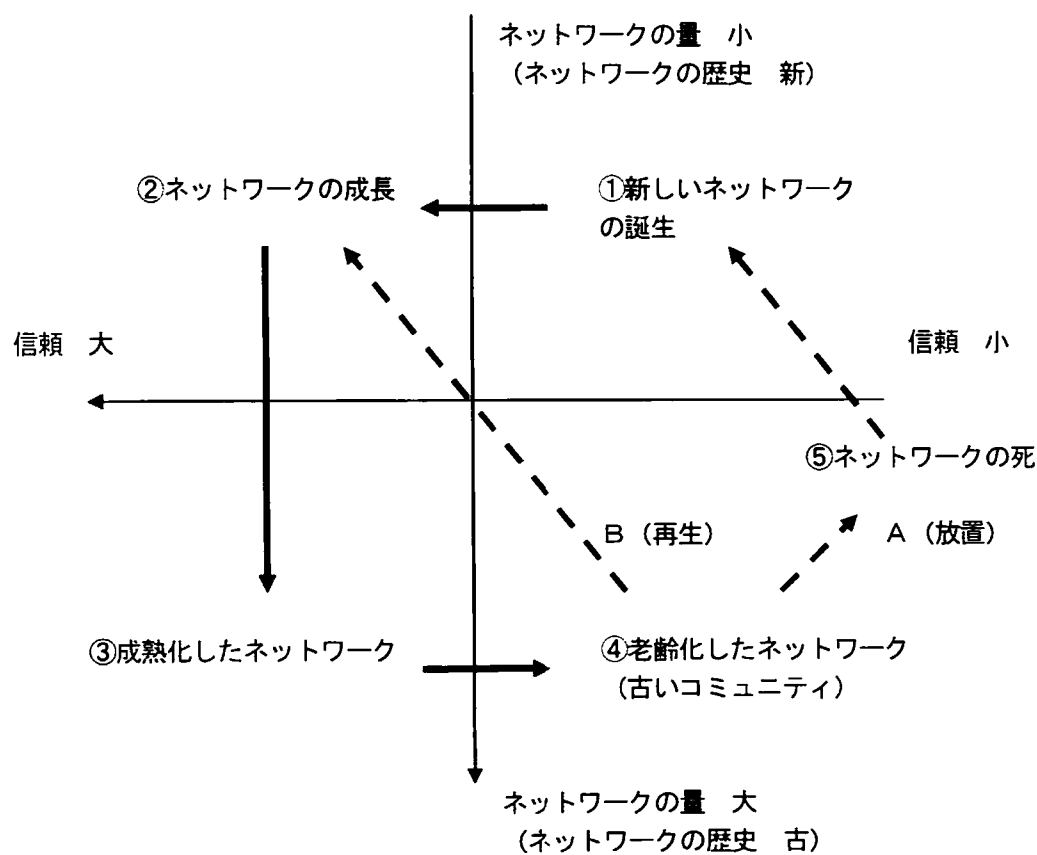


図7：ネットワークのライフサイクル（生と死）

まちづくりを考える上で、革新がもたらされる以前の古い商店街コミュニティも、その多くがこの罫に陥っている段階であると考えられる。

④老朽化したネットワークが、その後どのような道をたどるかは、2つの可能性があると考えられる。

そのまま放置すれば(A)、やがて⑤ネットワークの死に至り、精算されて、(1)新しい別のネットワークが芽吹くまで待たなければならない。

これを救うのがネットワークの再生プロセス(B)であろう。ソーシャル・キャピタルの新たな第3次元( $\beta$ )を構築して、②ネットワークの再成長に至り、ネットワークの死を回避するのである。

既存の商店街に、(多くの場合外部の)新しいアイデアをもったキーパーソンが、新たなまちづくり組織を形成していくプロセスがこれに相当するといえるだろう。

### 【注】

(注1) ここでいう「広い意味でのまちづくりの互酬性を作り出す社会経済的システムの仕掛け」とは、本文にもあるように、ネットワークとその間の信頼に帰着できないその他すべての要素を含んでいる。したがって、伝統的なソーシャル・キャピタル概念そのものにすべてを統合できない解釈もありうる。その場合には、

$\alpha$  = 第2次元、信頼(ネットワークの質・強度)

$\beta$  = 「広い意味でのまちづくりの互酬性を作り出す社会経済的システムの仕掛け」でソーシャル・キャピタル概念に含まれると考えられる内部要素、

$\gamma$  = 「広い意味でのまちづくりの互酬性を作り出す社会経済的システムの仕掛け」でソーシャル・キャピタル概念に含まれない外部要素、

と分解し、

ミクロなモデルとしては、

[まちづくりにおける成功要因]

= [ネットワーク(第1次元) +  $\alpha$  +  $\beta$  +  $\gamma$ ]

≡ [ソーシャル・キャピタル] +  $\gamma$  (外部要因)

ソーシャル・キャピタル = ネットワーク(第1次元) +  $\alpha$  (第2次元) +  $\beta$  (第3次元)

という枠組みになる。

(北田 [2006] におけるアートなどは $\gamma$ 、すなわちソーシャル・キャピタルを外部から活性化する要素と考えるべきかもしれない。ただし、まちづくり組織の中で、アートがネットワークを活性化してソーシャル・キャピタルとして一体化したような関係性については $\beta$ に含めるべきであろう。)

(注2) からほりプロジェクトにおける長屋と、京都、奈良などのいわゆる町屋の明確な区別は難しいと思われるが、六波羅氏の用法で、大阪の物件を長屋と呼ぶことにしておく。

(注3) 地域には20ほどの町内会があり、大きく桃園地区連合と桃谷地区連合に分かれている。

(注4) 日曜日にかけてはまわってよいか了解を得たほどであるという。

(注5) 現在、からほり倶楽部の町屋リノベーション事例となっている拠点の「惣」「練」は、いずれも、取り壊す予定の情報を六波羅グループが聞きつけ、大家さんに飛び込みで救ったもので、からほり倶楽部側が能動的に動いたものだった。

(注6) 2005年末現在「からほり倶楽部」と称している会員は140名前後あり、執行部である理事は7名いるが、「惣」「練」の実際の経営運営は「六波羅真建築事務所」である。今後の展開としては、7名のうち、実際に資金運営に積極的な4名が中心になり企業組合「長屋すつとくばんく」を立ち上げ、2006年1月に登記した。

### 【参考文献等】

NPO法人街屋集団ウェブサイト：<http://www.machiya-shudan.org/>

半場智 [2006] 「都市型商店街の新しい潮流とまちづくり～ソーシャル・キャピタルと経営技術の観点から～」(創造都市



研究科都市政策専攻修士論文)。

大守隆 [2002] 「ソーシャル・キャピタルと日本経済への影響」[ECO-FORUM] 第21巻2号、pp.24-31、(財)統計研究会。

大守隆 [2002] 「ソーシャル・キャピタルの経済的影響」[ECO-FORUM] 第22巻1号、pp.3-14、(財)統計研究会。

楓ギャラリーウェブサイト：<http://www.7a.biglobe.ne.jp/~kaede-g/>

からほり倶楽部ウェブサイト：<http://www.eonet.ne.jp/~karahoriclub/>

からほりまちアートウェブサイト：<http://www.eonet.ne.jp/~karahoriclub/machi-art/>

北田暁美 [2006] 「アートは都市を創造するー京都三条あかり景色プロジェクトと泉北アートプロジェクトを事例としてー」(創造都市研究科都市政策専攻修士論文)。

小長谷一之 [2005a] 『都市経済再生のまちづくり』古今書院。

小長谷一之 [2005b] 「都市再生のオールタナティブス」(矢作弘他編『シリーズ都市再生1』日本経済評論社)。

小長谷一之他 [2005] 「コンバージョン、SOHOによる地域再生」学芸出版社。

高見沢実編 [2006] 『都市計画の理論ー系譜と課題』学芸出版社。

坂のまちアートinやつおウェブサイト：<http://www.yatsuo.net/kankou/art/index.html>

佐藤寛 [2001] 「援助と社会関係資本ーソーシャル・キャピタル論の可能性」アジア経済研究所。

直田春夫 [2005] 「千里ニュータウンのまちづくり活動とソーシャルキャピタル」『都市住宅学』第49号、都市住宅学会。

日本建築学会編 [2005] 「まちづくり教科書第9巻：中心市街地活性化とまちづくり会社」丸善。

宮川公男・大守隆 [2004] 「ソーシャル・キャピタルー現代経済社会のガバナンスの基礎」東洋経済新報社。

Fukuyama, Francis [1995] "*Trust: The Social Virtues and the Creation of Prosperity*", Simon & Schuster (加藤寛訳 [1996] 『信』無くば立たず』三笠書房)。

Jacobs, Jane [1961] "*The Death and Life of American Cities*", Vintage Books (黒川紀章訳 [1969] 『アメリカ大都市の死と生』鹿島研究所出版会)。

Norris, P. [2002] "*Democratic Phoenix: Reinventing Political Activism*", Cambridge University Press.

OECD [2001] "*The Well-Being of Nations: The Role of Human and Social Capital*", Center for Educational Research and Innovation.

Putnam, Robert D., R. Leonardi and R.Y., Nanetti [1993] "*Making Democracy Work: Civic Tradition in Modern Italy*", Princeton University Press (河田潤一訳 [2001] 『哲学する民主主義ー伝統と改革の市民的構造』NTT出版)。

Putnam, Robert D. [1993] 'The Prosperous Community: Social Capital and Public Life', "*The American Prospect*", 13 (Spring), pp.35-42.

Putnam, Robert D. [1995] 'Bowling Alone: America's Declining Social Capital', "*Journal of Democracy*", 6(1), pp.65-78.

Putnam, Robert D. [2000] "*Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*", Simon & Schuster.

Putnam, Robert D. [2002] "*Democracies in Flux: The Evolution of Social Capital*", Oxford University Press.

Uslaner, Eric M. [2002] "*The Moral Foundations of Trust*", Cambridge University Press, New York.

World Bank [1998] "*The Initiative on Defining, Monitoring and Measuring Social Capital: Social Capital Initiative Working Paper No.2*", The World Bank.